

大学におけるスポーツ活動を中心とした国際交流

著者	内田 和寿
図書名	京都光華女子大学こども教育研究第2号
開始ページ	27
終了ページ	33
出版年月日	2018-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000874/

大学におけるスポーツ活動を中心とした国際交流

内田 和 寿

I. はじめに

社会がグローバル化する現代において、文部科学省(2017)は、新しい学習指導要領が目指す姿の1つとして、言語や文化に対する理解を深め、国語で理解したり表現したりすることや、外国語を使って理解したり表現したりできるようになることで、日本文化及び異文化を理解して多様な人々と協働していくことが重要であると示している。また、2020年に東京でオリンピック・パラリンピック競技大会が開催されることを契機に、スポーツへの意識を高め、他者への共感や思いやりを学び、国際交流、国際平和に寄与する態度を身に付けることも重要であると示している。

つまり、「スポーツ」と「国際交流」は今後の我が国の教育における重要なキーワードであると捉えることができる。この2つのキーワードを融合した取り組みは既に散見し、我が国のスポーツによる国際交流の動向について、内田(2015)を基に概観すると、観光庁が2011年にスポーツツーリズム推進基本方針を策定し(観光庁2011)、スポーツと観光を融合したスポーツツーリズムを推進するなかで、訪日外国人を対象としたインバウンドのスポーツツーリズムが各自治体やスポーツ団体を中心に展開されている。具体例としては、大手の旅行会社が各自治体やスポーツ団体と協力して企画するスポーツ観戦ツアーが挙げられる。プロスポーツの試合を観戦し、その前泊後泊で観光や買い物を行うツアーである。また、参加型としては、地域のマラソン大会に参加して、その前泊後泊で地域住民と交流したり、地域のグルメスポットや観光名所を訪問したりするツアーが挙げられる。

次に、大学におけるスポーツによる国際交流について内田(2016)を基に概観すると、そのほとんどは大学体育会の運動部による交流であり、スポーツの競技力向上を主目的とする練習試合や合同練習が主な内容

となっており、きっかけのほとんどは指導者のつながりによる。

例えば、神戸親和女子大学のバレーボール部は、関西大学リーグの1部に所属するチームであるが、フィリピンと交流があり、フィリピンの国内大会に招待されたり、フィリピンの代表チームやクラブチームが神戸親和女子大学で練習や練習試合を行ったりという取り組みを近年行っている。

その一方で、大学で強豪の体育会運動部に所属しない学生は、大学の教育の一環として留学したり、訪日留学生と交流したり、サークルの活動で観光ガイドをしたりするといった国際交流は体験できるが、スポーツによる国際交流を行う機会は十分であるとは言えない。後述の体育会運動部に所属しない学生が大学生の割合として圧倒的な数を占めるのは言うまでもない。大学において親交を目的としたスポーツと国際交流を結びつける教育プログラムが実施されることで、より多くの学生が気軽にスポーツによる国際交流を体験できるようになるであろう。さらには、活動を通して、異文化を知り、日本文化を再認識し、スポーツの魅力を感じ、意思疎通を図ろうとお互いに気遣って会話することは、学生本人の素養を高め、生きる力を育むことにつながるかと捉える。

そこで本研究は、体育会運動部としての活動ではない、大学のスポーツによる国際交流について、事例を基に振り返りを行い、今後の発展的展開について検討することを目的として研究を進めていく。研究の手順として、まずはスポーツの価値と機能について整理し、事例とする大学が女子大学であることから、女性のスポーツについても潮流をまとめる。次に、事例として京都光華女子大学(以下:本学)における活動を挙げ、大学におけるスポーツ活動を中心とした国際交流について論考する。

II. スポーツの現代的価値と機能

スポーツの捉え方は幅広く、国や地域によって異なり、社会情勢の変化によっても価値観は転換する。本研究では、スポーツを18世紀にイギリスで誕生した「近代スポーツ」として捉え論を進める。

我が国におけるスポーツの価値の変遷を、稲垣・谷釜(1995)、内田・横山(2013)に依拠し、なおかつ女性のスポーツについて石田(2005)を基に整理すると、戦後から1970年前半までは、1964年の東京オリンピックでのメダル獲得や国威掲揚の風潮からスポーツは強いほど価値があると捉えられていた。女性は、従前の激しい運動は女性の身体に悪影響を及ぼすという通説を覆すかの如く、エベレスト登頂に成功したり、マラソンに参加したりと様々なスポーツに参加するようになった。また、メディアでも女性のスポーツ活動が取り上げられるようになり、1964年の東京オリンピックの女子バレーボール決勝戦の視聴率(66.8%)は、スポーツ番組において現在も破られることのない記録的な高視聴率であった。つまり、女性も競技スポーツをすることが当たり前になりつつある時代であった。

その後、我が国には生涯教育という社会の流れが起り、1979年に「ニュースポーツ」という和製英語が誕生したことをきっかけに、だれでも気軽に楽しめる軽スポーツやレクリエーションの活動が普及し、スポーツの価値は競技力が強く強いことだけにあるのではなく、あらゆるスポーツに対等の価値があるという風潮になっていく。そして、性別や年齢、競技レベルに関係なく一緒に楽しむことができる様々なスポーツが普及し、地域発祥のスポーツも誕生していくのである。1980年代は、世間ではフェミニズム論やジェンダー論に基づく女性運動が盛んになり、女性の社会進出が叫ばれるようになり、スポーツに関しても同様で、ただ参加するのではなく、女性がリーダーとして参画する活動も見られるようになった。

ところで、女性のスポーツ政策に関する世界的な指針となったのは、1994年の第1回世界女性スポーツ会議における「ブライトン宣言」であり、日本は2001年に署名している。これは、あらゆるスポーツの場に女性が参加する権利と女性の登用を保障するよう、政府やスポーツ団体に求めた宣言であり、スポー

ツ界から女性差別撤廃を求めた宣言である(岡野2010)。つまり、我が国における女性のスポーツに関する本格的な取り組みは、まだ始まったばかりである。

2011年には我が国でスポーツ基本法が公布され、前文にスポーツは世界共通の文化であると明示され、すべての国民が各々の関心、適正等に応じて、安全かつ公正な環境下で日常的にスポーツに関わることが理念の1つとして示された。具体的な取り組みの動向として、サッカーやラグビー、野球といった従来男性が行っていたスポーツに女性の実施者が増加し、地域のスポーツクラブや学校の部活動でも盛んに行われ、全国大会が男子大会と同様に行われる種目も多くなっている。また、卓球やテニスのミックスタブルスのように、男女がペアを組んで競技を実施する種目が増加し、従来女性の種目とされていた新体操やチアリーディングなどで男性の実施者が増加している。このほかにも、競技レベルの垣根を超えた、トップアスリートと市民のスポーツ交流が増えたり、子どもから高齢者まで参加して一緒に活動するスポーツイベントが数多く実施されたりしている。つまり、スポーツはボーダーレス、ジェンダーレスという風潮にある。

現在では、自身が「する」スポーツだけでなく、選手を応援する「観る」スポーツや、選手をサポートする「支える」スポーツにも価値が見いだされ、スポーツに関わる人みんな楽しんで楽しむことに意義があると捉えられている。このことに関連して、スポーツを専門とする大学の学科をみると、トップアスリートやスポーツ指導者の育成だけでなく、スポーツビジネスコースやスポーツトレーナーを目指すコースが設立されたり、女子大学においてもトップアスリートの育成だけでなく、ジュニアスポーツの指導者を育成したり、高齢者やキッズを支援するスポーツ活動に力を入れたり、スポーツに関わる様々な職業人の養成が行われるようになっている。

次に、スポーツの機能について整理する。スポーツの機能として一般的に知られているのは、活動者自身の健康の増進に寄与するということである。

しかし、スポーツの機能はこれだけではなく、内田・横山(2013)より、健康の増進に寄与すること以外に3つ挙げる。まず1つ目は、普遍性の高さである。スポーツは世界共通のルールに則り行われるため、例え言葉が通じなくとも、身振り手振りルールやプレーの用

語を用いてコミュニケーションをとることができるため、国際交流のツールとしての機能を有している。2つ目は、対象者に応じてルールや用具を変更したり工夫したりすることができる応用性の高さである。この機能を活用することで、年齢や性別、競技レベルを超えて多くの人と一緒にスポーツを楽しむことができるのである。3つ目は、受動的に楽しめることである。つまり、自身がスポーツ活動の主体者にならずとも、スポーツを観戦したり応援したり、活動者をサポートしたりするという楽しみ方があるということである。

このようなスポーツの保有する諸機能に着目し、堀他（2007）は、スポーツの活動がまちづくりに有効であると述べ、横山（2011）は、スポーツが持つソーシャル・キャピタル形成機能は地域を紡ぐ無形の資源であると述べており、人々の交流促進のツールとして地域活性化にスポーツを活用するケースが増加する動向にある。

大学の活動においても、教員や学生の学問領域や利害関係に縛られることなく、平等な関係性で誰でも気軽に参加できる活動であるというスポーツの特性を活かして、多くの人と人とを結びつけることを目的に、例えば新入生のオリエンテーションや研修のコミュニケーションワークの一環として活用されるケースが多い。

Ⅲ. 本学におけるスポーツによる国際交流

1. 香港との交流

本学では、2015年に香港のバレーボールクラブチーム（以後チーム名：Victory）と国際交流を行った。交流のきっかけはVictoryのコーチが筆者と過去にFIVB（国際バレーボール連盟）主催の国際セミナーに共に参加し、懇意な関係にあったことによる。

Victoryのほとんどの選手は大学生で、香港の母国語は広東語であるが、どの選手も英語が堪能であった。

香港と日本のバレーボールに関する交流を概観すると、トップチーム同士の交流は、アジアの諸大会で対戦するくらいで、日本のトップチームが香港の女子チームと合宿をしたり合同練習会をしたりする機会は皆無である。その理由の1つは、競技レベルに差があることである。FIVB（2017）によると、2017年8月更新の女子世界ランクで日本は6位、香港は66位と

その差が大きいことが伺える。

Victoryは香港の2018年度のバレーボール国内リーグでトップリーグに所属するチームである。選手のほとんどは過去に日本へ訪れたことがあり、日本のバレーボールについて興味関心が高いが、世界ランクの違いや、指導者間の交流ネットワークが無いことから、小グループによる観光のみの訪日であり、今回が初めてのチームによるバレーボール活動を含んだ海外合宿であった。

本学に於いての国際交流は、5日間実施された。主な内容は、こども教育学科の学生（1年生）とのスポーツ交流、バレーボール交流、学生のガイドによる京都観光及び、Victoryの競技力向上を目指した他大学や高校との交流であった。それぞれについて、詳細を述べていく。

スポーツ交流は、学生が履修する科目「スポーツ実技」の授業にVictoryの選手が参加する形で実施された。授業の担当者である筆者が、学生にVictoryの選手を紹介し、小グループに分かれてそれぞれで自己紹介を行い、グループでの準備運動およびパス練習を行い、ソフトバレーボールのゲームを実施した（図1）。



図1 ソフトバレーボール交流

活動の序盤では、初対面による緊張と英語でのコミュニケーションによる緊張がみられたが、一緒にボールを追いかけて、声を出し合ってプレーしていくことで緊張がほぐれてくると、自発的にコミュニケーションを取り、肯定的情意行動（円陣、ハイタッチ、拍手、ガッツポーズなど）が多くみられるようになった。

バレーボールの交流は計2回行った。1回目は、こ

ども教育学科の学生有志でチームを編成し、「スポーツ実技」の授業のソフトバレーボール交流終了後に国際親善試合を行った。ソフトバレーボールで交流した学生は、両チームの応援を行った。学生有志チームはVictoryを迎え入れる準備として、事前に集まって数回の練習を行い、非常に意欲的であった。

2回目は、後日、バレーボールの練習を合同で行い、交流を深めた。この時はVictoryと学生のミックスチームを2つ編成し、それぞれ香港のコーチが監督としてチームをまとめた。ゲーム前とゲーム間にはチームのミーティングが行われ、簡単な英語を用いて、コンビネーションのサインとチームのフォーメーション及び作戦を確認した(図2)。



図2 チームミーティングの様子

次に、学生のガイドによる京都観光について述べていく。この活動も、学生が事前に準備をする内容が多く、複数の教員が関わりサポートを行った。まずは、観光コースの計画立案である。こども教育学科の科目「社会」の授業で、担当教員の指導の下、学生による話し合いが行われ、観光スポットとして球技の神様が祭られている白峰神宮や日本庭園が美しい龍安寺などが候補に挙がり、訪日する人にとっては少しなじみの薄い、しかし、京都の学生がお勧めの名所として選定した。

また、観光をする際にガイドブックを基に説明したほうが、より伝わるであろうとの考えから、オリジナルのガイドブック作成を「社会」の授業で同様に言い、授業外で英語を専門とする教員から英語表現の指導を受けて完成させた。この時作成したガイドブックは、後日、香港のスポーツマガジンに「Victory 日本京都暑期集訓」として記事で取り上げられ、そこでは、おもてなしの心に感銘を受けたとされており、学生に

とって非常に嬉しいことであった(図3)。

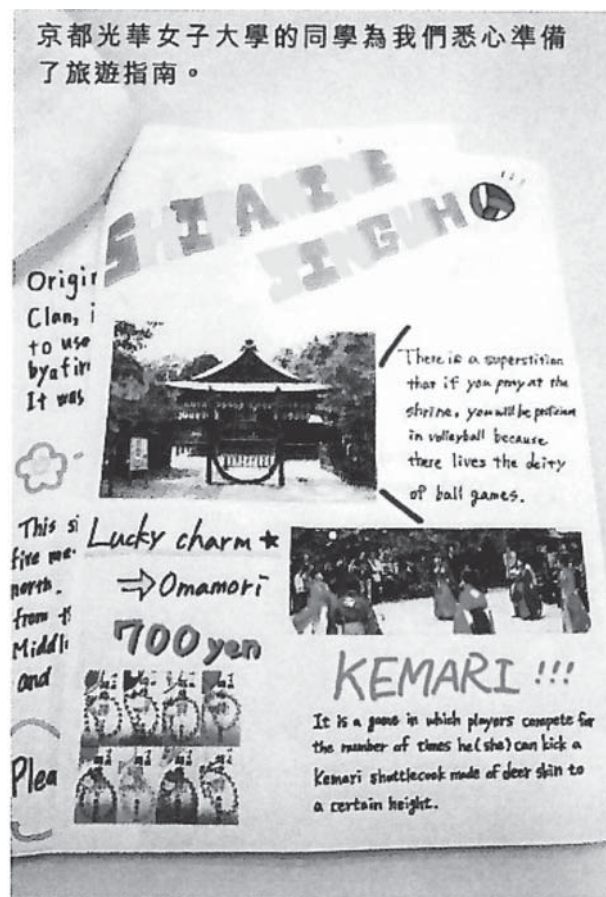


図3 SPORTSOHO (2015) に掲載された記事

また、今回さまざまな活動を通して、学生とVictoryの選手は記念撮影を行ったり、LINEの交換を行ったり、お互いのFacebookを紹介したりと、今後、交流の継続が期待される連絡先の交換が行われていた。

Victoryと本学との国際交流は、こども教育学科の学生以外とも行われた。具体的には、国際交流センター主催のパーティー、煎茶部によるお点前披露である。国際交流センター主催のパーティーは、丁度、韓国とカナダからも留学生が大学を訪問する日に日程の調整を行い実施された。それぞれの国の参加者が自己紹介を行ったり、学生の企画によるゲーム大会が実施されたりと、大いに盛り上がる会となった。煎茶部によるお点前披露は英語で実施され、Victoryにとっては日本文化を知る貴重な場となったと言えよう(図4、図5)。



図4 国際交流パーティー



図5 煎茶部との交流

Victory との交流活動は、本学の学生とだけではなく、他大学の学生や高校生ともネットワークを形成して行われた。この活動の主目的は、Victory のバレーボールの競技力向上である。筆者が交流を持つ京都市内の大学や高校のバレーボール部の練習に Victory を引率し、日本のバレーボールを体験する機会を設けた。この機会は同時に、日本の大学生や高校生が国際親善試合をする機会となった。活動としては、一緒に日本の練習を行ったり、交流試合を行ったりした。本学では十分に満たすことのできなかった内容について補完するものであった。

2. インドネシアとの交流

本学では、2015年に引き続き2016年にインドネシアのバレーボールクラブチーム（以後チーム名：W-JAVA）と国際交流を行った。交流のきっかけは、香港のコーチ同様、FIVBの国際セミナーに共に参加したインドネシアのコーチが2015年度に行った本学での香港との交流活動を聞きつけ、申し出があったことによる。

W-JAVA のほとんどの選手は大学生で、母国語はインドネシア語であるが、半分以上の選手は英語が堪能であった。

インドネシアと日本のバレーボールに関する交流を概観すると、FIVB（2017）より、インドネシアの女子世界ランクは66位であり、トップチーム同士の交流は香港のケースと同様に皆無である。しかし、インドネシア国内にはバレーボールのプロリーグが存在し、所属する選手はバレーボールのプロとして生計を立てている人がほとんどである。また、チームによっては補強選手として数名の外国人選手とプロ契約する企業もあり、世界ランクが香港と同位ではあるが、競技レベルはインドネシアが数段上である。

W-JAVA は、ジャワ島にあるクラブチームで、国内のクラブ選手権では常に優勝を争うチームで、大学生ながら、プロリーグのシーズン中はプロとして活躍し、国の代表選手に選出される学生も多数在籍している。インドネシア人が日本を訪問するにはVISAが必要であり、費用も高いことからほとんどの選手は今回初めての来日であった。

本学に於いての国際交流は、7日間実施された。主な内容は、こども教育学科の学生（1年生）とのスポーツ交流、日本文化を体験する交流、学生のガイドによる京都観光、W-JAVAの競技力向上を目指した高校や他大学との交流であった。それぞれについて、詳細を述べていく。

スポーツ交流は、1年生が履修する「スポーツ実技」の授業への参加を検討したが、学生の履修者数が多く体育館のスペースの問題で実施が困難であったことから、インドネシアとのスポーツ交流を1年生に案内し、参加者及び、観戦者を募った。その際、どのようなスポーツで交流したいかを学生に尋ねたところ、インドネシアはバドミントンが盛んであることを知っていた学生がおり、バドミントンをしたいという意見と、バレーボールでぜひ外国の代表選手とプレーしてみたいという意見があり、この2種目で交流を行うこととし、授業の空き時間に、スポーツ交流をする学生と応援する学生が体育館に集い、親睦を深めた（図6）。バドミントンはダブルスで対戦し、時にはミックスでペアを組むこともあった。バレーボールは、本学の学生が教えてもらう形で練習やゲームを行った。応援する学生は、いいプレーが見られると、一緒に歓声を上げて

楽しんだ。



図6 インドネシアとのスポーツ交流

次に、日本文化を体験する交流について述べていく。こども教育学科の科目「社会」の授業において、昨年度は京都観光を計画したが、今回は日本の文化を紹介するというテーマで、担当教員の指導の下、学生が、けん玉、だるま落とし、コマ回しを紹介し、体験してもらうという活動内容であった。W-JAVAの選手は、興味深そうに何度も何度も挑戦し、技が成功した際は、みんなで感動を共有することができた。前日にスポーツで交流した学生がクラスにいたこともあり、積極的なコミュニケーション活動が行われ、最後は全員でアーチを作ってお見送りをした(図7)。



図7 アーチを作ってお見送り

こども教育学科の学生以外の学生との交流イベントは2つ実施した。1つは、学生のガイドによる京都観光である。国際交流センターから全学の学生にガイドのボランティア募集を呼びかけてもらい、学科の枠を

越えて学生に国際交流を体験してもらおうと試みた。残念ながら、応募者は少なかったが、W-JAVAの選手に金閣寺と渡月橋を案内し、たくさんの記念撮影を行った。もう1つは、煎茶部によるお点前披露を昨年に引き続き英語で実施した。W-JAVAの選手は、インドネシアでは体験したことのない正座に悪戦苦闘しながら、日本の伝統文化について学びを深めていた。

そして、昨年同様に他大学の学生や高校生ともネットワークを形成して、W-JAVAのバレーボールの競技力向上を主目的とした活動も実施した。

IV. おわりに

事例で紹介した本学の取り組みは、現在も規模は小さいものの、継続して行っている。W-JAVAとバレーボールで交流した学生は、2016年の3月に京都外国語大学で開催された国際親善バレーボール大会に参加し、他大学やマレーシアのチームと交流を深めた。Victoryと交流した学生は現在3年生になり、数名の学生は再度本学を訪問した選手と再会を果たした。このように、国際交流が一過性のイベントで終わるのではなく、何かしらの形で心に残り、つながりを継続していくことが大切であると考えます。

今後、日本へ来たいという海外の学生やスポーツチームが今以上に増加することは明白であり、大学によるスポーツ活動を中心とした国際交流は、学生にとって、また、訪日する学生にとってもより魅力的な活動になることが希求される。

そこで、最後に本研究のまとめとして、本学の事例を振り返りながら、今後の大学のスポーツ活動を中心とした国際交流の在り方について検討を行う。

我が国でのスポーツ活動を中心とした国際交流は、スポーツ活動+ a (スポーツ以外の交流活動)という考え方が主流で、企業や自治体が企画するスポーツツーリズムの、スポーツ+観光・グルメといったモデルが多く活用されている。大学が主体となって実践するスポーツ+ a の活動の特長は、何と云ってもスポーツ+教育が実現できることにある。教育の中には、歴史、文化、伝統、語学、観光、食、道徳など様々な内容が包含され、各大学がその特色に応じて内容を取捨選択し、トータルとして複合的な魅力のある活動を展開していくことが、大学の独自性を示すこととなる。

本学の事例においても、スポーツを専門とする筆者が、ただスポーツによる国際交流だけを行うのではなく、社会科学を専門とする教員や英語を専門とする教員と協力し、また、大学の国際交流センターや煎茶部とも連携を取って、教育的な国際交流プログラムを充実させた。

大学として、今まで国際交流を身近に感じることもなかった学生や、スポーツを身近に感じることもなかった学生に、気軽に国際交流やスポーツを体験できる機会を提供することは、学生の新たな興味喚起につながる。

また、学生が仮に語学や人とのコミュニケーションが苦手であっても、スポーツという共同体験を通して感動を共有し、心でお互いを理解し、人と人とのつながりを感じることであれば、語学への興味関心が芽生え、人と接することに楽しさを覚えるのではないかと学生の成長を期待する。

さらには、スポーツの活動を通して参加者間のソーシャル・キャピタルの形成を促進することで、一体感のある雰囲気醸成することは、学科や大学への帰属心、愛校心を高めることにつながるのではないかと考える。

このように、学生本人の素養を高め、生きる力を育むことを実現するために、スポーツの諸機能を理解し、スポーツだからこそできる活動を実践し、なおかつ、充実した教育プログラムを付随させる活動を継続して行うことが、今後の大学におけるスポーツ活動を中心とした国際交流に求められている。

将来的には、大学が核となり、他大学やほかの教育機関、自治体、企業と連携して活動の人的ネットワークを拡大していくことで、さらに、より多くの人々がスポーツと国際交流を身近なものとして、日常生活の一部として捉えることができるようになることを目指して、研究を深めていきたい。

引用文献

FIVB (2017) 世界ランキング女子
2017年10月23日閲覧
http://www.fivb.org/en/volleyball/VB_Ranking_W_2017-08.asp
堀繁・来田悟・薄井充裕 (2007) スポーツで地域をつく

る. 東京大学出版会.17-19.50-59
稲垣正浩・谷釜了正編 (1995) スポーツ史講義. 大修館書店.84-86.151-152
石田良恵 (2005) 女性とスポーツ環境. モダン出版. 114-117
観光庁 (2011) スポーツツーリズム推進基本方針
2017年10月15日閲覧
<http://sporttourism.or.jp/pdf/sporttourismpromotionbasicpolicy.pdf>
文部科学省 (2017) 新しい学習指導要領等が目指す姿
2017年10月15日閲覧
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm
岡野進 (2010) 概説スポーツ. 創文企画.95
SPORTSOHO (2015) 日本京都暑期集訓.
Sportsoho Media Limited sep#80. 67
内田和寿・横山勝彦 (2013) スポーツによる地域活性化—女性のスポーツ活動に着目して— 京都滋賀体育学研究 第29巻第1号.1-11
内田和寿 (2015) スポーツツーリズムによる国際交流 香港バレーボールチームを事例として. 京都ノートルダム女子大学研究紀要 45号.45-57
内田和寿 (2016) 香港クラブチームのスポーツツーリズム (京都). バレーボールミーティング報告.
2016年8月
横山勝彦 (2011) スポーツとソーシャル・キャピタル. 菊幸一・斎藤健司・真山達志・横山勝彦編. スポーツ政策論. 成文堂.336-338

